



宮司プレス 第百五十号

彦島八幡宮 宮司 ニューズ

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和元年 十二月三十一日

◇宮司の柴田です。一月に二回の発行、しかも、発行日の間隔（かんかく）が、十日という快挙です。ちなみに、平成二十五年十一月三十日発行の第九十号の三日というのが、これまでの最小間隔です。かの有名なインドの指導者であるマハトマーガンジーさんは、「明日、死ぬつもりで生きなさい、永遠に生きるつもりで学びなさい」と諭（さと）されました。やればできるのであります。いよいよ暮れ果ててまいりまして、明日は、令和になって初めてのお正月であります。私は、一昨日、およそ九百五十通の年賀状を投函（とうかん）しました。十四種類の言葉を墨書（ぼくしよ）し、印刷（いんぷつ）をしました。表の宛名（あてな）は、文明の利器のパソコンのソフトを駆使（くし）して印刷（いんぷつ）しましたので、どの言葉がどなたに届くか定かではありません。ちなみに、その墨書した言葉を列挙（れつきよ）してみましょう。

◇まず、宮司プレス第百四十八号に詳述（しようじゆつ）した「雨過天晴雲破処（うゑのじゆつ）」です。きつと、必ず澄み切った青空を仰ぐ（うやむ）ことがで

るという希望に満ち溢（あふ）れた前向きな未来志向の言葉かと思ひ認（したた）めました。◇「明浄正直勤務追進」、天武天皇様が、神様の心に近づく心がけと、その心で生活するめあてをしめされたものです。

◇「五日一風十日一雨」、天下泰平（てんかたいへい）の例えなので、そのような一年であつてほしいと願ひを込めました。

◇「日光照万民月色清人心」、当宮正面の大鳥居の柱に刻（きざ）まれています。日の光に感謝の心を忘れず、常に月の光のような清らかな心を忘れない、まさに、感謝とお陰様という謙虚な気持ちの大切さを教えてくれています。

◇「天恐地敬人愛」、前号第百四十九号に詳述（しようじゆつ）しました。

◇「三感四恩」、三寒四温（さんかんしおん）をもじった造語（ぞうご）です。三感の意味は、何気ない日常の出来事にも『感謝』、『感動』し、その事を心にしみ込ませる『涵養（かんよう）』、『これが、三感です。そし

て、神様、親（し）、師（し）、社会の恩に報（むく）いるよう生きていく、これが、「四恩」です。三感四恩の生活を心掛けていただきたいという思いで認めました。

◇「則神去私」、作家の夏目漱石さんが、晩年に、「則天去私（そくてんしよし）」という言葉を残されました。私は、「天」を「神」に勝手に変えて造語したので。その意味は、神様や目に見えない大きな力に身を委（ゆだ）ねて、私利私欲（しりしよく）を、かなぐり捨てて生きていくことの尊さです。

◇「至誠則坦」、儒学者（じゆがくしや）の山田方谷（やまだほうこく）さんの言葉で、「しせいそくだつ」と読みます。苦しく悲しい立場におられる人の事を思いやりながら、自分の成すべき事に、全力投球する、それこそが、誠の心だと説かれました。実は、ノーベル賞を受賞された大村博士の研究室には、この言葉が掲げられていたそうです。

◇「日清日新日進」、日々清々しく日々新たな気持ちで前向きに進みましようという意味です。神道の信仰の柱の一つに、「前向きに人生を楽しむ」というのがありますが、まさに、そのことを説いています。私の造語です。

◇「神喜地喜人喜」、これも私の造語ですが、神様を喜ばす心でおつとめをすること、地

域社会やそこに暮らす人々も笑み栄えるという、私の神職としてのポリシーです。

◇「他力信で自力生」、これも、私の造語ですが、今ある命に感謝をし、生かされて生きるというのが、「他力信(たりきしん)」、そして、いつも謙虚に活き活きと生活する「自力生(じりきせい)」、その繰返しの日々が、「日々是好日(にちにちこれこうじつ)」という、穏やかな日々につながるという意味です。

◇「随所主作 立所皆真」、「ずいしよしゆとなれば たつところみなしんなり」と読みますが、臨濟宗(りんざいしゅう)の臨濟録(りんざいろく)に書かれている言葉です。今、あたえられていることに全力投球しなさい、そうすると、きつと全てうまくいきますよというの、この八文字のなかに込められています。とても前向きになれる言葉ですので認めてみました。

◇「神道というは人々日用の間にあり」、出口佳延(でぐち よしのぶ)という神道家の残された言葉ですが、神道は祭典儀式が全てでなく、日頃の生活のなかにこそあるのだと説いています。神明奉仕、清掃奉仕、社会奉仕が、神職の奉仕の理想ですが、私の神職としての縁(よすが)となっている言葉でもあります。

◇最後に、「天地の なかにみちたる 草木

まで 神のすがたと 見つつおそれよ」という和歌です。これは、吉田兼邦(よしだ かねくに)という神職が残された和歌ですが、甚大(じんたい)な災害を目の当たりにすると、われわれ人間のはかなき弱さを痛感させられますが、大自然を恐れ敬う尊さを説かれています。以上が、年賀状に墨書した言葉です。自分への戒(いまし)めや新たな所信表明(しよしんひょうめい)、さらに、皆様の御多幸を願ひ認めたのでした。

◇さて、来年の干支(えと)は、「庚子(かのえね)の年であります。庚(こう、かのえ)は、杵(きね)で臼(うす)をつくすがたを表していて、「かわる」 「つなげる」を意味します。それに対して、子は、象形文字で子供の髪の毛が早く伸びることを表し、ふえるという意味があり、新しい生命が生まれようとしている状態を表しています。

◇このことから、来年の干支の意味の考察を試みます。ようやく芽生(めば)えた新しい命が、さらに、新たなものに変わろうとしている様ではないかと思えます。日本は、かつて「環境先進国」といわれ、今は高齢化の進展などで「課題先進国」といわれます。環境・エネルギーとヘルスケアでリーダーシップを発揮することが求められているそうです。そのためには、様々な改革が必要なの

のだそうです。東京オリンピックピックパラリンピックという新しい命が芽生える年でもあります。ねずみにあやかり、繁栄へとつながる年、沢山のいいことにつながる年となることを祈るばかりです。

◇平成十八年六月創刊の宮司プレス、十三年と六ヶ月でようやく節目の百五十号に到達しました。感慨深いものがあります。ちなみに、十三ヶ月遅れています。遅れなにか気にしないで、次は、二百号到達を目指したいです。御自愛ください。

◇一月の祭典行事会議等活動予定

▼初太鼓 *一月一日午前0時

▼歳旦祭 *一月一日

▼彦島八幡宮 *午前八時半

▼田の首八幡宮 *午前0時半

▼福浦金刀比羅宮 *午前一時

▼貴布禰神社 *午前六時半

▼元始祭 *一月三日

▼会社関係新年安全祈願祭参拝

*一月四日

▼六連島八幡宮歳旦祭 *一月十二日

▼田の首八幡宮どんど焼き *一月十二日

▼彦島八幡宮どんど焼き *一月十三日

▼八幡宮関係団体

◆早起会新年会 *一月十二日

◆維蘇志会新年会 *一月十三日